

令和5年度 1学期 期末考査

78期第1学年

国語（現代の国語）

100点
50分

令和5年6月29日（木）

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 解答用紙は、この冊子の間に挟んであります。
- 3 この問題冊子は13ページあります。問題は三問です。
- 4 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を上げて監督の先生に知らせなさい。
- 5 解答は、必ず解答用紙の所定の解答欄の枠内に1行で収まるように記入しなさい。
- 6 楷書で丁寧に、また濃い字ではっきりと記入しなさい。判別不能の文字は採点対象外とします。
- 7 字数制限のあるものは、原則として句読点も一字に数えます。
(指示のあるものは除く)。
また、制限字数の8割に満たない解答は採点対象外とします。
- 8 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけません。
- 9 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

	組		番	氏名	
--	---	--	---	----	--



大分県立大分上野丘高等学校

「二」次に示す中村桂子の「生きもの」として生きる」を読んで、後の問いに答えなさい。

①「人間は生きものであり、自然の中にある」。これから考えることの基盤はここにありますが。これは誰もがわかっていることであり、決して新しい。シテキではありません。しかし、現代社会はこれを基盤にしてでき上がってはいません。そこに問題があると思い、改めてこの当たり前のことを確認するところから出発したいと思います。

②まず、私たちの日常生活は、生きものであることを実感するものになっているでしょうか。朝氣持ちよく目覚め、朝日を浴び、新鮮な空気を体内に取り込み、朝食をおいしくいただく……これが生きものの暮らしです。目覚まし時計で起こされ、お日さまや空気を感ずることなどなしに腕の時計を眺めながら家を飛び出す……実際にはこんな朝を過ごすのが、現代社会の、とくに都会での生活です。ビルや地下街など、終日人工照明の中で暮らすのが現代人の日常です。これでは生きものであるという感覚は持てません。

③生きものにとつては、眠ったり、食べたり、歩いたりといった④「日常」が最も重要です。ですから、その日常のあり方を変革し、皆が当たり前に自然を感じられる社会を作ればよいのですが、ここまで来た近代文明社会を一気に変換するのは難しいでしょう。

④そこで、ここでの提案は、まずは一人一人が「自分は生きものである」という感覚を持つことから始め、その視点から近代文明を転換する切り口を見つけ、少しずつ生き方を変え、社会を変えていきたいと思いますかということ。一人一人の気持ちが変わらないまま、たとえばエネルギーについてだけ脱原発だとか、自然再生エネルギーへの「テンカン」が必要だとか唱えても、今すぐの実現は難しいでしょう。しかもそれはあまり意味がありません。自然エネルギーを活用する「暮らし方」が大切なのであり、その基本が「生きものである」という感覚なのです。

⑤近代文明をすべて否定するのではなく、生きものとしての感覚を持てるようにするところから転換を図ろうとするなら、生物学に大事な役割が果たせるはずだと考えています。なぜなら私自身この「ブンヤ」で学んだがゆえに、とくに意識せずに「生きものである」という感覚を身につけることができ、日常をそれで生きていけると実感するからです。簡単な例をあげるなら、冷蔵庫に入れておいた食べ物が賞味期限を越えてしまったようなときでも、それだけで捨てることができず、まだ食べられるかどうか、自分の鼻で、舌で、手で確認します。

⑥鼻や舌などの「感覚」で判断するとはなんと非科学的な、そんなことで大丈夫なのか、もっと「科学的」でなければいけないのではないかと言われそうです。科学的とは多くの場合、数字で表せるということです。具体的には、冷蔵庫から取り出したかまぼこに書かれた日時をさすわけです。⑦「エイセイ」的な場所で製造されてお店に出されていると信じ、安全性の目安として書かれている期限を見て、その期間に

食べるのがふだんのやり方です。それを科学的と称しているけれど、これでよいのでしょうか。こうした判断のしかたは、私には、自分で考えず科学という言葉に任せているだけに思えます。⑧「科学への盲信」で成り立っているように思います。

⑦もちろん、「感覚」だけではわからないことがたくさんあります。科学を通じて微生物による腐敗や毒物の生成などの危険性を知り、それに「タイシヨ」することは重要です。しかし、賞味期限内であれば危険はなく、それを過ぎたら危険と、数字だけで決まるものではありません。科学的な知識があったとしても、毎日の生活の中で、自分で病原菌や毒物を検出し、その食べ物が危険かどうかをチェックするわけではないのですから、科学による「保証」の限界を知ることが大事です。

⑧食べ物を自らの手で作ったり、採ったりしていた時代には、安全性については自分で責任を持つしかありませんでした。科学・科学技術のおかげで、より進歩した暮らしやすい生活ができるようになり、安全が保証された形で、食べ物が手に入るようになったのはありがたいことです。でも、そこに期限を決める数字が印刷されるようになると、それに振り回され、それに従うことが正しい暮らし方ようになってしまいました。自分では全く科学に触れているわけではなく、時には科学的な考え方をすることもなく、ただ「科学が保証してくれているはず」という雰囲気の中で、何も考えずに数字を「鵜呑み」にしているのです。そうではなく、生きものであることを忘れずに、その力を生かすことが必要ではないでしょうか。

⑨ネズミやイヌなど他の生きものに比べたら、嗅覚などはかなり感度が悪くなっているとはいえ、私たちの五感はいいセンサーです。けれども、上手に使っていないと鈍くなるので、感度を保つためにも、日常その力を生かすことが大事です。科学を知ったうえで、機械だけに頼らず、生きものとしての感覚をも活用するのが、私の考えている「人間は生きものである」ことを基本に置く生き方です。科学的とされる現代社会のありようは実は他人任せなので、これは「自律的な生き方」をしようという提案でもあります。

⑩「うっかり期限の過ぎたかまぼこを、すぐには捨てずに、鼻や舌を使って判断する」という小さなことですが、⑪「一事が万事」、この感覚を生かすとかかなり生活が変わり、そういう人が増えれば社会は変わるはずです。常に自分で考え、自身の行動に責任を持ち、自律的な暮らし方をするのが、⑫私の考える「生きものとして生きる」ということの第一歩です。

問一 二重傍線部a～eのカタカナを漢字に改めなさい。

問二 波線部Ⅰ「鵜呑み」、Ⅱ「一事が万事」の本文中における語句の意味を次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

Ⅰ「鵜呑み」

- ア 物事を全体的に受け入れて探求すること。
- イ 物事の真意をよく理解せずに受け入れること。
- ウ 物事を中途半端に理解したままにしておくこと。
- エ 物事の実際を理解したつもりになっていること。
- オ 物事の表面的な真意に納得して実行すること。

Ⅱ「一事が万事」

- ア 細かい事柄にそのあとの結果が左右されるということ。
- イ 些細な行いが継続して起こること。
- ウ 一度成功すればその後がうまくいくということ。
- エ 小さな事柄の調子が他の全てに現れること。
- オ わずかな出来事が多くの意味を有していること。

問三 傍線部①「日常」に括弧がついている意図として適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自然の中で生きる生きものとしての「日常」を上位に置き、文明の中で生きる現代人の日常を批判する意図。
- イ 文明の中で生きる現代人の日常と、自然の中で生きる生きものとしての「日常」とを区別する意図。
- ウ 文明の中で生きる現代人にとって、自然の中で生きる生きものとしての「日常」は得難いことを強調する意図。
- エ 現代文明のありようは、生きものとしての「日常」を排除することによって成り立っていることを指摘する意図。
- オ 自然の中で生きるものの姿は、現代文明の中で生きる現代人にとっての「日常」の姿と実際は同じである事を示す意図。

問四 傍線部②「科学への盲信」で成り立っているように思います。」とあるが、どういふことか。七十字以内で説明しなさい。

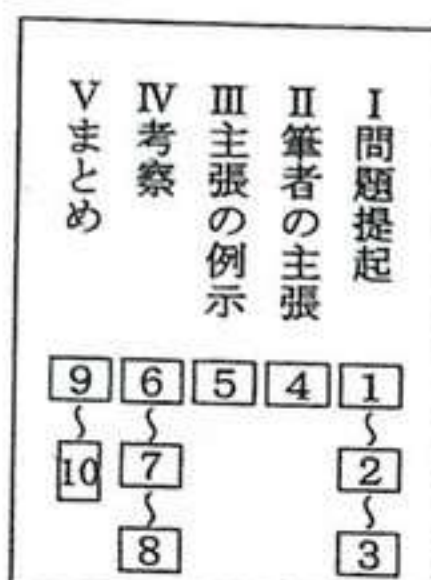
問五 傍線部③「わたしの考える「生きものとして生きる」とあるが、傍線部によってもたらされる結果を、本文の主旨を踏まえ百字以内で説明しなさい。

問六 次に示す本文構造として最も適当なものを、ア～オの選択肢の中から一つ選び、記号で答えなさい。

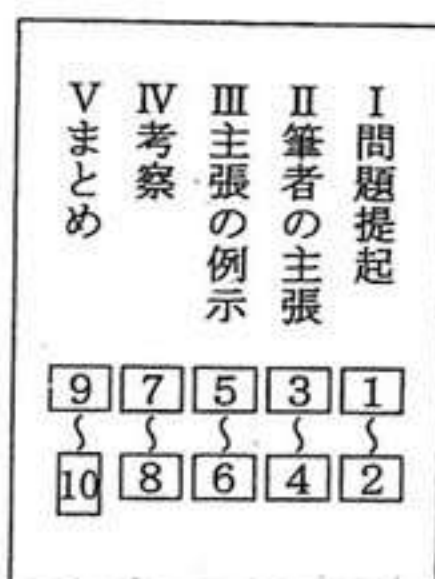
ア



イ



ウ



エ



オ



「二」次に示す山崎正和『水の東西』を読んで、後の問いに答えなさい。

「鹿おどし」が動いているのを見ると、その愛嬌の中に、なんとなく人生のけだるさのようなものを感じることがある。かわいらしい竹のシーソーの一端に水受けがついていて、それに算の水が少しずつたまる。静かに緊張が高まりながら、やがて水受けがいっぱいになると、シーソーはぐらりと傾いて水をこぼす。緊張が一気に解けて水受けが「ハ」ね上がるとき、竹が石をたたいて、こおんと、くぐもった優しい音を立てるのである。

見ていると、I 単純な、緩やかなリズムが、無限にいつまでも繰り返される。緊張が高まり、それが一気にほどけ、しかし①何事も起こらない徒労がまた一から始められる。ただ、くぐもった音響が時を刻んで、庭のセイジャクと時間の長さをいやがうえにも引き立てるだけである。水の流れなのか、時の流れなのか、「鹿おどし」は我々に流れるものを感じさせる。②それをせき止め、刻むことによって、この仕掛けはかえって流れてやまないものの存在を強調していると言える。

私はこの「鹿おどし」を、ニューヨークの大きな銀行の待合室で見たことがある。日本の古い文化がいろいろと紹介される中で、あの素朴な竹の響きが西洋人の心を引きつけたのかもしれない。だが、ニューヨークの銀行では人々はあまりに忙しすぎて、一つの音と次の音との長い。カンカクを聞くゆとりはなさそうであった。それよりも窓の外に噴き上げる華やかな噴水のほうが、ここでは水の芸術として明らかに人々の気持ちをくつろがせていた。

流れる水と、噴き上げる水。

そういえばヨーロッパでもアメリカでも、町の広場には至る所に見事な噴水があった。ちよつと名のある庭園に行けば、噴水はさまざまな趣向を凝らして風景の中心になっている。有名なローマ郊外のエステ家の別荘など、何百という噴水の群れが庭をぎっしりと埋め尽くしていた。樹木も草花もここでは添えものにすぎず、壮大な水の造型がとどろきながら林立しているのに私は息をのんだ。それは揺れ動くパロック彫刻さながらであり、ほとばしるというよりは、音を立てて空間に静止しているように見えた。

時間的な水と、空間的な水。

そういうことをふと考えさせるほど、日本の「デントウ」の中に噴水というものは少ない。せせらぎを作り、滝をかけ、池を掘って水を見ることはあれほど好んだ日本人が、噴水の美だけは近代に至るまで忘れていた。デントウは恐ろしいもので現代の都会でも、日本の噴水はやはり西洋のものほど美しくない。そのせいか東京でも大阪でも、町の広場はどこもなく間が抜けて、表情に乏しいのである。

西洋の空気は乾いていて、人々が噴き上げる水を求めたということもあるだろう。ローマ以来の水道の技術が、噴水を発達させるのに有利であったということも考えられる。だが、人工的な滝を作った③日本人が、噴水を作らなかつた理由は、そういう外面的な事情ばかりではなかつたように思われる。日本人にとって水は自然に流れる姿が美しいのであり、圧縮したりねじ曲げたり、粘土のように造型する対象ではなかつたのであろう。

言うまでもなく、水にはそれ自体として定まった形はない。そうして、形がないということについて、おそらく日本人は西洋人と違った独特の好みを持っていたのである。「行雲流水」という仏教的な言葉があるが、そういう思想はむしろ思想以前の感性によって裏づけられていた。それは外界に対する受動的な態度というよりは、④積極的に、形なきものを恐れな心現れではなかつたのだろうか。

④見えない水と、目に見える水。

もし、流れを感じることだけが大切なのだとしたら、⑤我々は水を実感するのに、もはや水を見る必要さえないと言える。ただ断続する音の響きを聞いて、その間隙に流れるものを間接に心で味わえばよい。そう考えればあの「鹿おどし」は、日本人が水を鑑賞する行為の極致を表す仕掛けだと言えるかもしれない。

問一 二重傍線部 a d のカタカナを漢字に改めなさい。

問二 波線部 I 「単純」 III 「積極的」の対義語を答えなさい。また II 「趣向を凝らして」の意味として最も適当なものを選択肢の中から一つ選び、記号で答えなさい。

II 「趣向を凝らして」

A 風景に合うように考えて

I より目立つように細工して

ウ 景色に溶け込むようにして

E 風情が増すように工夫して

オ 技術を余すことなく発揮して

問三 傍線部①「何事も起こらない徒労がまた一から始められる」とあるが、このような「鹿おどし」の様子から、筆者はどのようなものを感じているか。本文中から十五字以内で抜き出さなさい。

問四 傍線部②「それをせき止め、強調していると言える」について、「鹿おとし」がなぜ「流れてやまないものの存在を強調」すると言えるのか。次の選択肢の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 日本人は人間の有限性を認識し、それに対して自然に無限性・永遠性を見いだすものであるから。
イ 「鹿おとし」はもともと水の流れの中に作られており、流れる水の親しみを印象付けるものだから。
ウ 単純で緩やかなリズムが持続的に繰り返されることが、時間が無限に流れることと同じだから。
エ 「鹿おとし」は一定の間隔を置いて響くが、その無限に断続する音が水を見なくても逆に水の流れを感じ取らせるから。
オ 「鹿おとし」は水の流れを造形物とみなさず、水と時間の流れを感覚として捉えることができるから。

問五 傍線部③について、「日本人」が、「噴水を造らなかつた」「外面的な事情」にはどのようなことがあると考えられるか。本文の記述をもとに二点答えなさい。

問六 傍線部④「見えない水と、目に見える水」というような表現は、本文において三回目である。これは文章展開上でどのような役割を果たしているか。次の選択肢の中から二つを選び、記号で答えなさい。

- ア 前の段落の要約
イ 次の段落の見出し
ウ 東西文化の対比の提示
エ 日本文化の独自性の提示
オ 鹿おとしの特徴のまとめ
カ 伝統文化の評価の要約
キ 東西文化の優劣の提示

問七 傍線部⑤「我々は水を実感するのに、もはや水を見る必要さえない」と言えるのはなぜか。五十字以内で説明しなさい。

【三】次に示す『羅生門』を読んで、後の問いに答えなさい。

ある日の暮れ方のことである。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。

広い門の下には、この男のほかにも誰もない。ただ、所々丹塗りの剥けた、大きな円柱に、きりぎりすが一匹とまっている。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男のほかにも、雨やみをする市女笠や揉烏帽子が、もう二、三人はありそうなものである。それが、この男のほかには誰もいない。

なぜかという、この二、三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか、飢饉とかいう災いが続いて起こった。そこで洛中のさびれ方はひととおりではない。旧記によると、仏像や仏具を打ち砕いて、その丹がついたり、金銀の箔がついたりした木を、道端に積み重ねて、薪の料に売っていたということである。洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、もとより誰も捨てて顧みる者がなかった。するとその荒れ果てたのをよいことにして、狐狸が棲む。盗人が棲む。とうとうしまいに、引き取り手のない死人を、この門へ持ってきて、捨てていくという習慣さえできた。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも気味を悪がって、この門の近所へは足踏みをしないことになってしまったのである。

そのかわりまたからすがどこからか、たくさん集まってきた。昼間見ると、そのからすが、何羽となく輪を描いて、高い鵄尾の周りを鳴きながら、飛び回っている。ことに門の上の空が、夕焼けで赤くなるときには、それがごまをまいたように、はつきり見えた。からすは、もちろん、門の上にある死人の肉を、ついに来るのである。——もともと今日は、刻限が遅いせい、一羽も見えない。ただ、所々、崩れかかった、そうしてその崩れ目に長い草の生えた石段の上に、からすの糞が、点々と白くこびりついているのが見える。下人は七段ある石段のいちばん上の段に、洗いざらした紺の襦の尻を据えて、右の頬にできた、大きなきびを気にしながら、ぼんやり、雨の降るのを眺めていた。

作者はさつき、「下人が雨やみを待っていた。」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようという当てはない。ふだんなら、もちろん、主人の家へ帰るべきはずである。ところがその主人からは、四、五日前に暇を出された。前にも書いたように、当時京都の町はひととおり衰微していた。今この下人が、永年、使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波にほかならない。だから「下人が雨やみを待っていた。」と言うよりも「雨に降りこめられた下人が、行き所がなくて、途方に暮れていた。」と言うほうが、適当である。そのうえ、今日の空模様も少なからず、この平安朝の下人の Sentimentalism に影響した。申の刻下がりから降り出し

た雨は、いまだに上がる気色がない。そこで、下人は、何をおいても差し当たり明日の暮らしをどうにかしようとして——いわばどうにもならないことを、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さつきから朱雀大路に降る雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。

①雨は、羅生門を包んで、遠くから、さあという音を集めてくる。夕闇はしだいに空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜めに突き出した壁の先に、重たく薄暗い雲を支えている。

どうにもならないことを、どうにかするためには、手段を選んでいいとは思はない。選んでいけば、築土の下か、道端の土の上で、飢え死にするばかりである。そうして、この門の上へ持つてきて、犬のように捨てられてしまえばかりである。選ばないとすれば——下人の考えは、何度も同じ道を低回したあげくに、②やつとこの局所へ達着した。しかしこの「すれば」は、いつまでたっても、結局「すれば」であった。下人は、手段を選ばないということを肯定しながらも、この「すれば」のかたをつけるために、当然、そのあとに来るべき「盗人になるよりほかにしかたがない。」ということ、積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいたのである。

下人は、大きくさめをして、それから、大儀そうに立ち上がった。夕冷えのする京都は、もう火桶が欲しいほどの寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇とともにエンリョなく、吹き抜ける。丹塗りの柱にとまっていたきりぎりすも、もうどこかへ行ってしまった。下人は、首を縮めながら、山吹の汗衫に重ねた、紺の襖の肩を高くして、門の周りを見回した。雨風の憂えのない、人目にかかる恐れのない、一晩楽に寝られそうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かそうと思つたからである。すると、サイワイ門の上の楼へ上る、幅の広い、これも丹を塗つたはしが目についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。下人はそこで、腰にさげた聖柄の太刀が鞘走らないように気をつけながら、わら草履を履いた足を、そのはしこのいちばん下の段へ踏みかけた。

それから、何分かのちである。羅生門の楼の上へ出る、幅の広いはしこの中段に、一人の男が、③猫のように身を縮めて、息を殺しながら、上の様子をうかがつていた。楼の上から差す火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。短いひげの中に、赤くうみを持つたにきびのある頬である。下人は、初めから、この上にいる者は、死人ばかりだと、④たかをくくつていた。それが、はしごを二、三段上つてみると、上では誰か火をとぼして、しかもその火をそこごとく、動かしているらしい。これは、その濁つた、黄色い光が、隅々にくもの巣をかけた天井裏に、揺れながら映つたので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしているからは、どうせただの者ではない。

下人は、⑤やもりのように足音を盗んで、やつと急なはしごを、いちばん上の段まで這うようにして上りつめた。そうして体をできるだけ、平らにしなが、首をできるだけ、前へ出して、恐る恐る、楼の内をのぞいてみた。

見ると、楼の内には、うわさに聞いたとおり、いくつかの死骸が、⑥無造作に捨ててあるが、火の光の及ぶ範囲が、思ったより狭いので、数はいくつともわからない。ただ、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるということである。もちろん、中には女も男もまじつていろいろらしい。そうして、その死骸はみな、それが、かつて、生きていた人間だという事実さえ疑われるほど、土をこねて造つた人形のように、口を開いたり手を伸ばしたりして、ごろごろ床の上に転がっていた。しかも、肩とか胸とかの高くなつてゐる部分に、ぼんやりした火の光を受けて、低くなつてゐる部分の影をいつそう暗くしながら、永久におしのごとく黙つていた。

下人は、それらの死骸の腐乱した、⑦シユウキに思わず、鼻を覆つた。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を覆うことを忘れていた。ある強い感情が、ほとんどことごとくこの男の嗅覚を奪つてしまつたからである。

下人の目は、そのとき、初めて、その死骸の中にうずくまつてゐる人間を見た。槍皮色の着物を着た、背の低い、痩せた、白髪頭の、猿のような老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松の木切れを持つて、その死骸の一つの顔をのぞき込むように眺めていた。髪の毛の長いところを見ると、たぶん女の死骸であらう。

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、⑧暫時は息をするのをさえ忘れていた。旧記の記者の語を借りれば、「頭身の毛も太る」ように感じたのである。すると、老婆は、松の木切れを、床板の間に挿して、それから、今まで眺めていた死骸の首に両手をかけると、ちやうど、猿の親が猿の子のしらみを取るように、その長い髪の毛を一本ずつ抜き始めた。髪は手に従つて抜けるらしい。

その髪の毛が、一本ずつ抜けるのに従つて、下人の心からは、恐怖が少しずつ消えていった。そうして、それと同時に、この老婆に対する激しい憎悪が、少しずつ動いてきた。——いや、この老婆に対すると言つては、語弊があるかもしれない。むしろ、あらゆる悪に対する反感が、一分ごとに強さを増してきたのである。このとき、誰かがこの下人に、さつき門の下でこの男が考えていた、飢え死にするか盗人になるかという問題を、改めて持ち出したら、⑨おそろく下人は、⑩なんの末緒もなく、飢え死にを選んだことであらう。それほど、この男の悪を憎む心は、老婆の床に挿した松の木切れのように、勢いよく燃え上がり出してゐたのである。

下人には、もちろん、なぜ老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかつた。したがつて、合理的には、それを善悪のいずれに片づけてよいかわからなかつた。しかし下人にとっては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くということが、それだけですでに許すべ

からざる態であつた。もちろん、下人は、さつきまで、自分が、盗人になる気でいたことなどは、とうに忘れていたのである。
そこで、下人は、兩足に力を入れて、いきなり、はしこから上へ飛び上がった。そうして聖柄の太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩み寄つた。老婆が驚いたのは言うまでもない。

問一 二重傍線部 a、e のカタカナは漢字に、漢字はその読みをそれぞれ答えなさい。

問二 波線部 I 「たかをくくる」 II 「無造作に」の本文中における語句意味として最も適当なものを、次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

I 「たかをくくる」
ア 楼の上には死体が捨てられていて、誰もいるはずがないと確信していたということ。
イ 楼の上に誰か来たとしても、捨てられている死体を恐れ逃げだすに違いないと思つたこと。
ウ 楼の上には死体が捨てられているだけで、大したことはないと思つていたということ。
エ 楼の上に誰かいたとしても、同じ境遇の者でありたいと思つていたこと。
オ 楼の上には死体が捨てられているけれども、一夜を過ごすことはできると考えたということ。

II 「無造作に」
ア 混然と乱れた様子で
イ 慎重でなく、簡単に
ウ 無意識的に
エ 周りに配慮することなく
オ 秩序もなく

問三 傍線部①「雨は、羅生門を包んで、……重たく薄暗い雲を支えている」という描写にはどのような表現効果があるか。最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア さまざまな災いが起こつて、人々の心が悲観的になつてしまい、生きる氣力を失つたことを象徴する効果。
イ 時代の流れに打ち勝つことができず、その場のしぎで何とか生きようとする下人の活力を示す効果。
ウ 物語の展開上、社会全体の大きな問題から、「下人」という個人の問題へと話題を転換する効果。
エ 荒廃した京都が復興しつつある様子を、重たい雲を押し上げる羅生門の屋根が示す効果。
オ 空模様と同様に、下人の心情も暗く重苦しいものであり、それに堪えている様子を表す効果。

問四 傍線部②「やつとこの局所に達着した」とはどういうことか。この説明として、最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 生きていくためには、手段を選ぶことはできず、選んでいれば死ぬしかないという自らの現状を理解したこと。
イ 明日の暮らしのため、盗人になるかならないかをいつまでも悩んでいる場合ではないと気づいたということ。
ウ 生きていくためには、手段を選ばず、盗人になるよりほかにしかたがないという決断を下したということ。
エ 生きていくためには、手段を選んではいられないと知りながらも、盗人になる決断ができないでいること。
オ 明日の暮らしのため、手段を選ばないとすれば、盗人になるしかないという考えに至つたということ。

問五 傍線部③と④について、次の問いに答えなさい。

1、2 か所に共通して使われている修辭法の名称を漢字で答えなさい。
2、2 か所から、下人のどのような心情がうかがえるか。これらの場面に共通する下人の心情を二十五字以内で説明しなさい。

問六 傍線部⑤「ある強い感情」とはどのような感情か。本文中から十五字以内で抜き出しなさい。

問七 傍線部⑥「おそらく下人は、なんの未練もなく、飢え死にを選んだことであろう」とあるが、下人がこのように思った理由を六十字以内で説明しなさい。

問八 本文を読んだKさんは、『羅生門』の作者（語り手）が読者の解釈を決めるほど強力に物語をコントロールしていると考え、その理由を次のようにノートにまとめた。Aに入る語句として適当なものをあとのア～オの中から一つ選び記号で答えなさい。

【ノート】

▼『羅生門』の語り手が、物語を強くコントロールする力を持つ理由

- ・旧記を引用したり、フランス語を用いたりすることでその博学ぶりを披露しているため。
- ・自ら「作者」と名乗って語ることで、物語を構成する主体として単なる語り手以上の地位を確立しているため。

A のような俯瞰した視点での語りを採用しているため。

【選択肢】

- A ア ある視点を設定し、そこから見えることだけを語る
ウ 読者と対話したり、呼びかけたりするように語る
オ 語り手の心情の独白という形式を保ちながら語る
イ 人物の心理に加えて登場人物たちも知り得ない情報も語る
エ 客観的な描写に徹し、論理的な帰結を重視しながら語る

問九 『羅生門』について、次の問に答えなさい。

- 1、この作品の作者の名前を漢字で正確に答えなさい。

- 2、この作者の作品について、次の選択肢の中から間違っているものを二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「戯作三昧」 イ 「地獄変」 ウ 「河童」 エ 「和解」 オ 「蜘蛛の糸」 カ 「歯車」 キ 「舞姫」